

悪霊の棲む日々

西村寿行



西村寿行

悪霊の棲む日々



悪霊の棲む日々

昭和五十二年五月十日 第一刷
昭和五十三年二月二十日 第五刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 西村 寿行

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(局)六二三一(代表)
振替東京四一四三九二番

(私丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えいたします)

目次

第一章 幻想の女——3

第二章 幻術の島——55

第三章 生物農薬——107

第四章 悪霊への反逆——160

第五章 死刑執行——210

装帧／辰巳四郎
插画／小松久子

第一章

幻想の女

1

奇妙な男であつた。

年頃は自分と同じくらいだった。いや、すこしは老けてゐるのか。だが、それも一つ二つ、おそらく三十一、二——そんなところだった。

多門^{たもん}辰也^{たつや}とその男が口をきくようになったのは、観光バスの中でだった。バスは石川県の金沢市から出て、能登半島を一周するコースを走っていた。

多門はそのバスに乗った。バスは空いていた。多門

はいちばん後ろの座席に腰を掛けていた。その男はあとから乗ってきて、前のほうに空いた席があるのにわざわざ後ろのほうにやってきました。多門の一つ前の席に腰を下ろした。

「いい天気ですね」

その男は腰を下ろすとすぐに振り向いて話しかけてきた。

「ええ」

多門はことばすくなく答えた。もともと多門は見ず知らずの人間と気やすく会話するのは好まなかった。億劫^{えいけつ}であつたし、話してゐるうちに性格や考えている

ことのちがいがはっきりしてきて気まずい思いをすることがある。そんなふうにはなりたくはなかったし、それに、いまの多門は別の意味で、見ず知らずの人間は警戒しなければならぬ。

——刑事か？

男が傍の席に来て、話しかけてきたときに、多門は真つ先にそのおびえを抱いた。中年の男なら、だれをみても刑事に思えた。まして傍に来られるとよけい、そう疑ぐる。

「わたし、佐藤久雄と申します」

男はつづいて名乗った。

佐藤と名乗った男が刑事でないのは、それで明らかになった。刑事なら、そんなゴチャゴチャしたことはない。振り向いて真つすぐに多門をみつめ、

〈多門辰也、草上康平殺害容疑で逮捕する〉

そう宣告するはずだった。

多門は、一応は、ほっとした。

「観光ですか」

佐藤は、多門のことばを聞きたくないことを気にする風情はなかった。関西弁の訛のあることばで問いかけた。

「ええ」

「日本海というと、なんですか、わたしは、こう、曇り空でなんとなく重たい風景を想像しとったんですが、いやにカラッとしていますな」

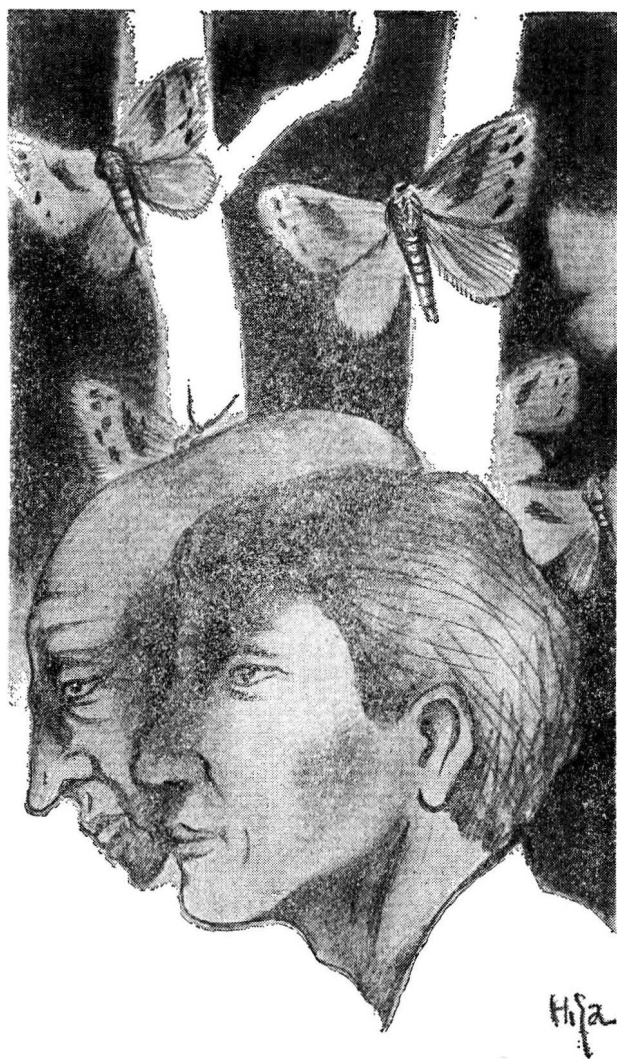
「そうですね」

「どちらから、ですか」

「ええ、東京です」

多門はいささかうんざりした。佐藤は道中の話し相手をみつけた気になっているようだった。佐藤の意図を察して、多門は席を移ることを考えた。席を移れば、まさかついてはくるまい。

だが、多門はそうはしなかった。それは佐藤という男の持つ、なにか奇妙な雰囲気（きふく）に惹かれるものがあつたからであつた。佐藤は日本海の空がカラッとしていたといった。そのことばがそっくり佐藤自身にあてはまつた。まるで屈託（くつとく）がなくみえる。何か愉しくてしか



たのないことがここから先の人生に待ち受けているといった感じにみえた。

人生に愉しいことなどあるはずはないと、なかばそう信じている多門からみれば、その澄明な明るさは気分を和ませた。

それに佐藤の容貌がある。最初に佐藤をみたとき、多門は小さな驚きを感じた。それは佐藤が自分に似ているからだ。他人の空似というやつであろうが、一瞬、はっとしたほど、自分に似ていた。容貌もそうだが、背丈から体恰好まで似ていた。もちろん、多門は自分の容姿を鏡とか写真でしかみたことはない。鏡でみている間はたしかに自分の顔は馴染みが深い。だが、鏡を離れるともう自身の顔というのはほんやりとなる。どんな顔だか、思い出そうとしてもさだかには輪郭がつかめない。おそらく、だれでもそうであろうと思う。他人の顔を思い浮かべるほどに自身の相貌を思い描ける人はいまい。よほどの特徴がないかぎりは、そうである。

だから、佐藤が自分に似ているといつてもはたして輪郭や、目や、鼻や、口が似ているのかどうかは、わからない。多門がとらえたのは感覚的なものだったかもしれない。

だが、ともかく、一瞬、はっとするほどには似ていた。

カラッとしていて、愉しそうで、その上、風貌が自分に似ている——多門が佐藤に奇妙な雰囲気を感じたのは、それだけではなかった。もう一つあった。それはなんとも表現しにくいものであった。佐藤の表情や動作、そして話すときの口調の中に多門はなにかわけのわからない不安めいたもののあるのを感じた。たとえていえば、佐藤の年頃はどうみても多門と同じ三十を過ぎたばかりにみえる。皮膚の艶から何からがそうである。にもかかわらず、ふっと佐藤の表情にひどく年老いた男の影が出るのだ。まるで、佐藤はもう一人の老人の影を体に潜ませているような気がするのだった。

動作や口調にもその気配があった。三十を過ぎたばかりの若さにもかかわらず、タバコをくわえたり、網棚にバッグを載せたりするときの動きに、若さが無い。動きそのものが緩慢であった。のろい。ひどく慎重な物腰に思える。なぜそうなのかは、わからない。

ことばにしても、そうであった。声は若い、ことばの選びかたつかいかたに、老人じみたところがある。まのびがしているのだ。

若いのだが、老人——多門は子供のオモチャのマジック・ミラーを思ひだした。角度を変えると別の像がダブッて浮かぶ、あれである。

奇妙な男であった。

「わたし、輪島^{わじま}ちゅうところに行くのです。ええところだそうだな」

佐藤は愉しそふだった。

バスは出発していた。八割ほどの座席が埋まっていた。観光バスといつても、路線バスとあまり変わりはない。団体客以外のおちこぼれを拾つて一日一便

だけ走るバスだ。たのめば、どこでもおろしてくれという。

多門は舢倉島^{くも}に渡るつもりでいた。昔、学生のように半月ほど滞在したことがあった。そのとき、泊めてもらつていた家の海女^{あま}とできた。郁子といつた。三十前で、働き者で、気性の強い海女だった。子供が二人に、かなり年のちがう亭主^{ていしゅ}がいたが、そんなことは意に介さなかつた。あり余るほどの性の欲望を体に秘めていた。翻弄するうちに、多門を弄んだ。

帰京してから多門は何度も恋文を書いた。会社勤めをするようになってからは、ときどき贈り物をした。ささいなものであったが、郁子はたいそう喜んで、お返しに高価な海産品を贈つてきた。そんな関係が数年つづいた。

多門が結婚して、切れるともなくその縁が切れた。縁が切れてから数年になる。

舢倉島に渡つて郁子を訪ねるかどうかは、多門は決めてなかつた。いまの郁子は四十すぎである。子供も

増えているかもしれない、もうあの一昔以上過ぎた一夏の情熱はあるまい、多門のことは忘れてしまつていよう。それに、多門は逃亡やつれてしていた。險相にもなっている。服装も着たきりで、薄汚れている。一目で落魄ぶりがわかる。訪ねれば迷惑顔をされるかもしれない、そのような邂逅はしたくなかった。

多門は殺人罪で警察に追われていた。指名手配が出たのが六月だから、すでに三カ月以上になる。梅雨から秋に氣候が変わつていた。逃走するための資金は底をつきかけていた。くたびれはてていた。東京から仙台北に流れ、北海道に渡り、ようやく能登半島にまで下つてきた。ここから先の漂泊のめどがなかった。行く先々でわずかの糧を得るために肉体労働をしてきた。それも一つところに長居はできない。転々としてきた。冬が近づいている。逃亡者にとって、冬は厳しい。多門は南に下るつもりだった。漠と、九州を思い描いていた。その途中で、舩倉島を思いだしたのだった。舩倉島を訪ねたところで、逃亡生活の何かが変わるわ

けではなかった。むしろ、島のようなところへ立ち寄るのは危険であろう。指名手配の容疑者とわかれれば、逃げ場がない。それを承知でバスに身をゆだねた多門

の心の奥には、積もり重なる疲労からくるなかば自棄的な荒涼感と、ひょっとして、郁子がかつての情熱をまだ抱いていて、多門を逃亡者と知った上で匿つてくれるのではあるまいかと思う、いちろの幻想があった。追われてついに逃げ場を失った男が描くはかない幻想だとは、承知していた。

直接に郁子を訪ねる気はないが、それでも何かしら漠とした希みを捨て切れなくてここまでやってきた自分に、多門は氣力の衰えを悟っていた。

バスは能登金剛のあたりを走っていた。海中公園に指定された、澄明度を誇る海岸だという。見え隠れする海は秋の陽にぶく映えていた。鷗が翔けている。

「不老不死というの、興味、ありますか」

ふいに、佐藤が訊いた。

「ふろうふし——」

多門は海から視線を戻した。訊ねられてもしばらくの間は、意味がつかめなかった。不老不死といったのだとわかって、多門は怪訝な顔を向けた。

佐藤は笑っていた。

2

「そうです。不老不死です」

佐藤久雄は、体ごと振り向いている。

「べつに、興味というほどのものは……」

興味というほどのものはなかった。いや、いまの多門にとっては、不老不死は益がない。警官の拳銃で撃たれても死なないというていどの不老不死ならよいが、終身刑かなんかで刑務所に入って不老不死になることを思うと、ぞっとする。

むしろ、こんな人生からは早く訣別を告げたい気がする。

「いいものだと思いますよ。いつまでも老いず、死な

ないというのはね」

佐藤は視線の奥に愉悅じみたものを溜めていた。妙な男だと、多門はあらためて思った。その双眸の奥にあるものをみていると、多門はふっと肌寒いもののかすめるのをおぼえた。昔、不老不死の仙術が信じられていた頃、二百歳や三百歳も生きたという高僧たちの不可思議な話がいっぱいあったと、古文書にある。

佐藤の表情にときにダブッてみえる老人の影を、多門はそれではあるまいかと、一瞬、疑った。何百年も昔から現代に生きつづけてきた高僧があつて、それがこの目の前の佐藤久雄ではないのか？

多門は苦笑した。そんな奇怪千万な話があつてよいわけはない。

「そんな薬があればよいでしょうがね。わたしはともかく、人類の夢ですから」

「ところが、あるのですよ」

佐藤はまじめな表情でいった。

「ある？ 薬が——」

しかたがなくて、多門は笑った。笑うか、席を移って逃げるかの、どちらかしかなかった。笑っているうちに、ふと多門はいやなことに気づいた。この佐藤と名乗る男は精神異常者ではないのか？ どこかの病院から抜け出してきた患者では？

その疑惑に神経が収縮した。妄想狂患者かもしれない。そういえば、この男の体全体にあって何かの所作のついでにふわーと滲み出る老人の影のようなものは、異常者特有の、あるいは分裂病者特有の人格遊離^{ドッセル}じみたものであるのかもしれない。精神病の一種に二重^{ダブル}身^{ボディ}というのがあると、何かで読んだことがあった。自分自身の分身をみることでできる病気だ。等身大の鏡を覗いたときの自分のように、目の前にそっくり同じ自分が立っていると、訴えるのだという。

この男はそうした精神病の一種で、もう一つの自身の影を体に納い込んでいて、それが奇妙な感じをみる者に与えるのかもしれない。

精神病者でなくては、バスの中で知り合った乗客に

不老不死の薬があるなどと、たわけたことをいうわけはない。

佐藤は笑っていた。透明にみえる笑いだった。

「あるのですけど、まあ、それはいいでしょう。こんなことを申し上げると、精神異常者とまちがわれますからね」

「ええ、まあ……」

考えを、見透された気がした。

「ところで、わたし、思うのですが」佐藤はちょっとことを切った。「こんなことを申して気を悪くなされる……」

「かまいませんよ。どうぞ」

ことばづかいやその他から判断して、精神異常者だとは思にくい。しかし、多門はその疑いを捨てたわけではなかった。もうすこし、様子をみようと思った。「他人の空想^{ファンタジー}というのですか、わたしとあなたは似ているとは思いませんか」

な、ということば尻が気になった。三十前後の人間の

つかうことばではないような気がする。それはともかく、空似を指摘されて、多門は精神異常者かもしれないと思う気持ち薄れた。

「ええ、わたしもそう思っていました」

「奇遇ですな」

「奇遇？」

ことごとに奇妙なことをいう男であった。奇遇といえは、思いがけなくめぐり遇うことの意味だ。見知らぬ者同士が遇ったところで、奇遇とはいわない。

「わたしね、いつも思うのですが、われわれには先祖があります。ふつう、父母か祖父父母の兄弟あたりの家系まではだいたい調べれば情報がわかりますが、その前の代以遠になると、もうどこに行ってもどんな生活をしているのか、つかみようがないのが実情ではないですか」

「ええ」

しかたなく、多門はうなずいた。佐藤は完全に後ろ向きになっている。風景など見ようともしない。

「かりにですよ、その何代か前の祖先の一人の家系が、どこかで栄えているとしますか、四、五代前の先祖の子孫なら、現在は二百人か三百人くらいはいるはずですよ。そうでしょうか」

「そうなりますかね」

質問の意味がわからない。

「なるんですよ。かりに七人の子供を産めばですよ、それがまた七人の子供を産み——というように」

「なるほど」

そんなことは、考えてみたことがない。

「まるで交際もなく、そんなのがいるなどとは夢にも思わないが、われわれはどこかに、あるいは同じ町内かもしれません、遠い代に別れた同じ血を引く一族と住んでいるという可能性があるのですな」

「はは——」

「ところで、遺伝子というのがありますね」

「ええ」

多門はタバコをくわえた。煙に巻かれないための用

心だった。精神異常者の中には、学者と二、三時間も議論をたたかわせて優劣がつかず、議論が終わっても学者に精神病患者だと気づかせなかったのがあると、何かで読んだ記憶がある。

また疑いが出てきた。

「われわれの体は遺伝子が造っています。ご存じでしょうが、複写人間ということばが最近では使われていますね。つまり、わたしの体は両親やそのまた両親——そういった先祖から受け継いだ遺伝子で構成されているのだそうです。われわれは先祖の複写にすぎないというのですな。人間の病氣、老化現象、寿命——そういったものは遺伝子の中に組み込まれているというのですな。ですから、その遺伝子をちょいといじくつてやれば、病氣にならなかつたり、老化が停まつたり、するのだそうです。それはともかく、遺伝子は先祖から受け継いだものですから、足の短い父母からは足の短い子供が、糖尿病の父母からは糖尿病の因子を持った子供が、産まれてきます。もちろん、これには遺伝

の法則というのがあって、三対一ですか、そういうぐあいになっているそうです。それと同じことで、同じ遺伝子から分かれた子孫同士の中には、どこかで非常によく似た同士が産まれる可能性があります。つまり、わたしのいいたいのは、ひょっとしたら、わたしとあなたは遠い先祖から分かれた、同じ血を引く一族かもしれないということです。他人の空似などということばは、実は遺伝の働きを知らなかったからできたことばで、ほんとうの他人の空似というのは存在しないのかもしれない。似た者同士の家系を厳密に調べていけば、どこかでつながるのではあるまいかと、わたしは、かように思うのですな」

「はあ——」

多門は生返事をした。佐藤が奇遇ということばをつかった意図がそれでわかったが、にわかに賛成する気にはなれなかった。佐藤が説明した内容そのものには格別の異論はなかった。そうであっても、そうでなくても、どちらでもよい。ただ、そこから論を進めて、

だから、二人は血縁にあるのかもしれないと早合点する
佐藤の短絡には、辟易するものがあつた。

——やはり、おかしい。

多門は、そう思った。やっかいな道連れだと心で嘆いた。突拍子もないことをいい、突拍子もないことを考へつく男だつた。最初に、奇妙だと思つた第六感は、正しかった。

多門は、みるとはなしに、佐藤の服装をみていた。背広もワイシャツも上物であつた。網棚に上げた旅行鞆も皮製の立派なものだ。懷も豊からしい。それらの外見が、多門をとまどわせた。病院を抜け出てきた患者にしては、そぐわない。

「ところで、あなた、お名前は？」

佐藤はしだいに、うちとけるといふのか、図々しくなつていた。

「土田といいます」

逃亡用の名前だつた。

「どちらまで行かれますな」

「べつに、どちらということは……」

話していると、多門は何か気圧されるものを感じた。威圧感というのではなく、そのことばづかいだつた。ことば尻になをつける。それがどうも、目上の人間が語りかけることばに思える。顔や体は同年配なのだが、かなり年配の男に話しかけられている気がしてしかなかった。

「それなら、輪島で降りませんか」

急に何か愉しいことを思いついたという、表情をみせた。

「輪島で？」

多門は用心した。

「一献さし上げようじゃないですか。袖振り合うも、といひます。これで、わたしはお金には困らないんですよ」

「はあ——」

料理屋の風景を、多門は思い浮かべた。打ち水をして、植え込みに塩を置いてある。すがすがしい風景だ。

運ばれる料理と酒を想像した。思わず、くらっと目まいがした。逃亡生活は悲惨だった。屋台とか、小汚ない飯屋以上の店には入れなかった。いつ追われて逃げなければならぬかもしれないから、極力、金は費わぬようにしてきた。アルコールを飲むのも立ち飲みであった。それでも逃亡資金は底を突きかけている。

心が動いた。が、しかし、多門は自分を抑えた。醜い根性だと、自身に嫌悪感を抱いた。おちぶれて、心まで汚辱にまみれようとしている。

「ご親切は、ありがたいのですが」

貧相な服装から風態を、佐藤がジロジロみている気がした。

「ま、いいじゃないですか」

佐藤はまわりを見回した。乗客は前のほうに席を取り、佐藤と多門のところは空いていた。

「あのね、あなた。わたしはね……」佐藤は声をひそめた。「美しい女性つきの、秘密ルートに乗っているんですよ。それも無料でね……」

「……………」

多門は黙って佐藤をみた。

3

どこにも美しい連れの女性などはいない。多門は、

これ以上この奇妙な男とつき合うのは危険だと思った。こんな話をしていて、一瞬後には急に何かを叫び出すかもしれない。ドロボーだとか、なんとか、ともかく予測がつかない。人目に立つことは避けねばならなかった。

「疑っているようですね」佐藤は多門の目を覗き込むようにした。「説明はできませんが、話はほんとうです。指定された旅館に行くと、みもしらない美しい女性が待っているんですよ。三日間はその女を独占できるんですよ……」

「それは、結構な……」

信じるわけではなかった。荒唐な話だ。しかし、多